

# カフカの「城」に関する試論

XXIII. バルナバス一家の追放と嘆願をめぐる覚書

—ユダヤ人カフカ一家の運命と重ねて—

## Versuch über Franz Kafkas Schloss

XXIII. Notiz um die Ausweisung und die Bittgänge der Familie Barnabas

— Im Zusammenfallen mit dem Schicksal des Juden Familie Kafka —

新潟歯学部 芳野 昇

Noboru YOSHINO

*The Nippon Dental University, Hamaura-cho 1-8,*

*Niigata 951-8580, JAPAN*

(2003年11月21日受理)

### 1

Franz Kafka の未完の長編小説「城」の主題は多様に考察できるが、何よりもやはり主人公Kの実存が重要な主題であることは異論がない。そしてKをめぐる展開する叙述から、あるいは登場する多彩な人物の持つ思惑や錯綜する関係から抽出できる諸相が、そのまま様々な主題へと派生していくと考えられよう。とりわけ作品中で最も特異なパーリア家族、Barnabas 一家の実相は究極的には作者 Kafka の家族の運命と重ねて考察できる。本稿は城に支配されている寒村で罰を受け、村八分となって追放されているが、懲りずに、また徒勞であっても嘆願を当て所無く求めつづける Barnabas 一家をめぐる、総括的な覚書である。他ならぬ Barnabas 一家の不幸の張本人の妹娘 Amalia を始め、姉娘の Olga、そして城の使者を自称している息子の Barnabas についてはすでに覚書しているので<sup>1)</sup>、この稿では父親を中心に覚書する。

### 2

2.1. Kは早くも第2章で思いがけず村道で、>X局長官く、つまり長官 Klamm の署名入りの手紙を持参している自称使者 Barnabas に会すのであった。疲労困憊していたにもかかわらず、雪の夜道を Barnabas の案内で、彼の腕に支えられながら、城をめざして歩いたが、辿り着いた所は、なんと城ではなくて、Barnabas の家ではないか。そこでKを出迎えたのは年寄りの二人と二人の娘、すなわち「バルナバスの両親と姉妹のオルガ、そしてアマーリア」<sup>2)</sup>だった。即刻にも城へ出向くはずのKにとっては、まず出鼻を挫かれてしまう羽目となり、この Barnabas 一家への訪問はKにとって、

まず不本意な行動であったのだ。

2.2. 「年老いて痛風にかかっている父親は(der alte gichtische Vater) ゆっくりと硬直した両脚を押し出しながら、より手探りしながら両手の助けをかりて前進している」<sup>3)</sup>、病身で、歩行困難な形姿で Barnabas の父が登場する。その病因を Olga から聞いていないKはただ先入観としても、敏感にその夜を過す以外は「この(バルナバスの) 家族には手間を決して煩わしたくない」<sup>4)</sup>、と決心していて、更に「彼等(この家族) に対してはある意味で全く(Kは) 羞恥心(Schamgefühl) を持たなかった」<sup>5)</sup>。本意の城へではなく、病躯の両親をかかえる、見るからに陰鬱な家族へ連れ立った自称使者 Barnabas への不信感をいだいてか、この家族の息子と日中に城へ行けることなぞは >不可能で(unmöglich)、物笑いで見込みのない試み(ein lächerlich hoffnungsloser Versuch) だった<sup>6)</sup>、とKは自覚し始めていることは見逃せない。城のある村に到着したけれども、ついに城に行けなかった不到達性、他ならぬ永遠に不可能な測量技師としての自己をKはもうこの時点で予感できた、と即断してはならないだろう。もちろん作者 Kafka の作意はすでにKの果てしなき徒勞の運命を暗示していることは確かである。そしてKはこの暗澹たる家族への異和感、しかしやがて親近感さえもいざなぎ始めるとすると、しだいに同じ運命を辿る人物像として、作者 Kafka はKを含めて、この家族の中に急迫してきたユダヤ人の運命、他ならぬ Kafka 自身の家族の過酷な運命と重ねて、緊迫と不安の感情を凝らして叙述していたとも言えよう。

2.3. 第15章の >アマーリアの所で(Bei Amalia)く、数日後に早くも、止むなく村の小学校の小使の職を臨時に得て、

意に反して Frieda と助手の二人と共に教室で寝起きする羽目となったKは、不本意ながらも、一方ではこの Barnabas 一家への接近を膠着状態の打開と願って、志向し始めた。誰れよりも使者 Barnabas の城からの報告を待つKは、この一家を嫌悪し、むしろ敵意をさえいだっていた Frieda の意向とのディレンマに立たされていた。「Kは今後とも極めて些細な事でも、一番最初の条件まで援助 (Hilfe) を必要とするだろうし、例えばバルナバスにしても意のままにならない (versagen) ようにも思えるのだった。フリーダを思っ、Kは終日バルナバスの家に問い合わせに行くのを躊躇 (gezögert) していたのだった」<sup>7)</sup>。焦燥感からくる性急さに堪えて、Frieda に先立って使者 Barnabas に出会えるように、戸外で雪掻きをして、周到さと執拗さを持ってKは Barnabas を待ちつづけるのだった。「しかしバルナバスは来なかった。そこで (バルナバスの) 姉妹の所へ出向くこと以外に残されていなかった」<sup>8)</sup>。

既知の Olga と Amalia と、部屋の奥に二人の老人 (die beiden Alten S.263) が薄暗い状態で居合せていた。まだ Olga からこの Barnabas 一家の運命、Amalia の事件について聞いていないKではあったが、すでにKは Amalia の眼差しに「いずれの他の感情を凌駕する孤独への欲求 (jedem andern Gefühl überlegenes Verlangen nach Einsamkeit S.264) を見抜き、異和感をいだき、かつこの家族への「全く厭わしい印象 (der ganze häßliche Eindruck S.264) を感受していた。反面、Amalia の持つ悲しみ (traurig) の表情や一種の威厳 (eine Art Hoheit) を見極めていて、「君達は (バルナバス一家は)、僕がこれまで知った限りでは、村人の他の誰れよりもおそらく (vielleicht) 御人好し (gutmütiger) だよ」<sup>9)</sup>、とこの姉妹に向って巧言している。

2.4. 第17章の「アマーリアの秘密 (Amalias Geheimnis)」<sup>10)</sup> で3年前の7月3日、村の消防祭における役人 Sortini への Amalia の侮辱事件を Olga が K に語った。そして「決定的なことは (das Entscheidende) アマーリアが (ソルティニーが待つ) 紳士荘 (Herrenhof) へ赴かなかったことです。彼女が使者をどう扱ったか、それ自体はなんとか大目にみられて、もみ消されえただろう。しかしアマーリアが (ソルティニーの下へ) 赴かなかったことで、私達の家族へ呪いが (Fluch) かけられたのです」<sup>10)</sup>。村の役人の呼出を拒絶するのは村娘にとって例外であって、正しく「アマーリアは実に例外 (Amalia ist ja eine Ausnahme S.311)」<sup>11)</sup> で、例外の行為に対する天罰 (Fluch) が下ったのだ、ということになる。Olga は更にKに向って、Frieda と Amalia を比較して、「アマーリアが拒絶したことをフリーダが果たしたのです」<sup>12)</sup>、と説明した。この時、まだ Frieda の愛を確信していたKは即座に「アマーリアが高慢さ (Hochmut) で為したことより、フリーダが持前の天真爛漫さ (Unschuld) で為したこ

とが増しだよ」<sup>12)</sup>、と Frieda を表象的に評価していた。ただ、Olga の話に聞き入っていたKはこの Barnabas 一家に対して、「罪のない家族 (die unschuldige Familie S.316) ということ、半信半疑ながらも一定の同情と共感を口にかけていることは見逃してはならない。

いずれにせよ、この役人侮辱事件を境に、城の消防隊への村からの次期団長として、最有力候補であったはずの Barnabas の父親は完全に失脚して、3年後の今は靴職人で弟子であった Brunswick が村の顔役となり、逆に娘 Amalia への責めを負った父親は廃人同様の過酷な呪いを受け、いわゆる村八分となり、追放された家長の形姿を呈示していくのであった。他ならぬナチスト達によるユダヤ人迫害の悪夢や修羅場を予感させる、恐怖の様相が暗示されている、と考えるとき、極めて深刻な作品構成と見なすことができよう。

2.5. Olga の述懐する3年前の父親像「彼の (父の) 顔は非常に若々しく、希望で喜んでいて (so jung und hoffnungsfreudig), もはや決してそんな (姿) は見られないものだった」<sup>13)</sup>。この家族の不幸は「すべて城から由来したこと (alles geht vom Schloß aus.S.316)」<sup>14)</sup> であり、「そのすべてはどうせ城の影響力 (das alles war schon Einfluß des Schlosses S.323)」<sup>15)</sup> が元凶あり、この家族の不幸の原因は Amalia に他ならないが、最も過酷な責めを負ったのは (am schwersten von dem Unglück S.326) 父親に他ならなかった。

第18章の「アマーリアの罰 (Amalias Strafe)」<sup>16)</sup> で語られる、この Barnabas 一家の追放は、すなわち「村で広く尊敬された一家族が (im Dorf eine angesehene Familie S.327)」<sup>17)</sup> 突如として、除け者にされ、疎外されていく羽目となる。この Barnabas 家族は追放されるユダヤ人聖家族のイメージを重ねることもできよう。

何よりも意気満々の愚直な父親が娘の事件に動転し、城の権力に怯え、極度に意気消沈し、憶病になり、「疲労困憊し、絶望して (zu müde und verzweifelt S.320)」<sup>18)</sup>、病苦にあるこの父親像は少くとも「判決」や「変身」の息子に対して常に強行で、威圧的で、力の権化のような父親とは異なり、運命に従順で、無批判で、一種の無抵抗の姿勢を持った父親像、「最悪の時でも一言も (アマーリアに) 非難を口にしなかった (auch in den schlimmsten Zeit kein Wort des Vorwurfs S.326)」<sup>19)</sup> 父親像をひたすら無実の罪に許しを乞い、生きながらえる悲惨な運命の「家長の心配く、と理解するしかないのだろうか。まずは城に支配される寒村で疎外され、解放されずにも、執念に満ちて生き抜こうとする村人、むしろ民族の一つの典型、と読み解くことができよう。

誰よりも城当局からではなく、同族のはずであった村人達から、「今は人間に語りかけるようにはや扱われず (nicht mehr wie von Menschen), もはや私達の家族名 (バルナバス) も名指しされない」<sup>20)</sup> 扱いになってしまい、父 Barnabas

は娘 Amalia の家族の指導権 (die Führung der Familie S. 329) と弧高な >沈黙 (Schweigen) < に従順になりながらも、「突然の不安に (in plötzlicher Beängstigung) 大声で叫ぶ」<sup>19)</sup>、発狂寸前の様相を時折呈する羽目となって、3年の歳月はすっかり父親を老化させ、母親と共に廃人化していく状態となっていて、ひたすら介護する Amalia の一途な献身に支えられていたのだった。

2.6. 第19章 >嘆願 (Bittgänge) < では張本人の Amalia 以外の Barnabas 家族は城当局に向けて >嘆願< する行動に走るのであった。「私達はアマーリアを裏切りまして、彼女の無言の命令から逃げて、(そうしないと) 私達はもはや生きながらえることはできなかつたし、全く希望なしに (ohne Hoffnung) 私達は生きていくことはできなかつたし、私達は各人のやり方で、城に嘆願し始め、あるいは押しかけ始めました。そのことは許してほしいのです。私達はなるほど何もできないことは分っていましたが、私達は城当局と持っていた唯一の希望に満ちた結びつき (die einzige hoffnungsvolle Verbindung) は父に好意的な役人、ソルティニーニでした。正にこの事件によって (durch die Ereignisse) 私達は近寄れなくなりましたが、私達は敢えて事を成したのです。父は (嘆願) し始めまして、村長 (役人) の秘書達、弁護や書記達にまで赴むく無意味な嘆願の道 (die sinnlosen Bittwege) でした」<sup>19)</sup>。何よりもこの一家の嘆願行動は、村で測量技師として滞在許可を要請している K の行動に正しく均しい。城当局が招聘したかどうか不確定のまま、むしろ K の一方的な要求、あるいは K の勝手な思い込みに近い行動と共通した側面が語られている。「それまで告発 (eine Anzeige) があったわけでなく、……実際に彼は (父は) 名誉の挽回 (das Zurückgewinnen der Ehre) を全く考えていなく、ただ赦免 (Verzeihung) だけを考えていたのです。しかし赦免を得るためには、彼は (父は) まず罪 (die Schuld) を確定しなければならなかつたのに、いずれの役所もそれが (罪が) 否認されているのでした」<sup>17)</sup>、と Olga は言明するのであった。そして不安と消沈の余り、父は「袖の下が十分でないが故に、罪が秘密にされているのだ」<sup>18)</sup>、とさえ考えていたという。ここには村を絶対的に支配する城の封建的体制、前近代的差別と抑圧の権力機構を暗示しているのみならず、人間社会の不可解な魔力や秘力、あるいは原罪ともいふべき、不可視な権化を作者 Kafka は暗示していることも指摘できよう。ただこうした人間の否定的志向を Kafka は敢えて止揚させず、むしろこの作品「城」を放棄してしまったこと自体が二重に暗示的だとも解読できよう。

2.7. 作品「城」に登場する Barnabas の父親の嘆願行動は姉娘 Olga の報告によれば、些細にわたっていて、かつ無益な程の自己卑下した、むしろ無謀な行動でもあった点で K の無鉄砲で無謀な試行の側面と類似しているとも理解でき、

そして結局いつまでも無残で不可解、かつ不可視な結果が残される全体像も類似しているとも解読できよう。少くともこの父親像は初期の作品「判決」、「変身」の父親像、常に自意識過剰な強行さ、力の権化のように高圧な父親像、更に作者 Kafka の父親 Hermann Kafka の実像と比較してみると、異常な程に従順で謙虚な形姿が込められていることが明白である。ただいずれも実直で、むしろ愚直で頑固な一途さの持主であることは共通していて、他ならぬ息子や家族への家長としての過剰な程の心配や配慮は類似して、貧民から成り上がり、孤立無援から自立してきた人間の持つ、気骨と忍耐を持前にした、時に狡猾さと横柄さを隠し持つ父親像が抽出できる。

城の役人への賄賂の方法があっても >賄賂< によっては何事も達せられない (aber erreichen kann man dadurch nichts S. 337) <、ことを十分に Barnabas の父は知っていたはずなのに、わが事、自分の家族にふりかかる切実な問題に直面して、冷静さと実直さが度外視され、私情が先行してしまったせいか、「父はその事をもちろん分かっていたが、彼は (父は) 大抵の事と同様に、この事を忘れてしまったのです。彼は計画を (den Plan) をしかるべく練ったのです」<sup>19)</sup>。Olga の報告からも娘 Amalia の事件に直面し、動転し、それまでの外交的で、快活な父親が頭脳に変調をきたし、健忘症に罹ったごとく、むしろ幼稚化、更に痴呆化と病軀が重なっていったとも見なすことができよう。寒村にあって疎外され、村八方の負目、他ならぬ宿命を予感した人間の衝動に違いない。

可能な限りの嘆願行動、城や村からの不当な扱いを認めながらも、父親は >希望の中に (in seiner Hoffnung S. 341) <、過酷な悪天候の下でも城の役人が往来する道端で一日中、直訴する行動を取り、ついにリューマチ症に罹り、同行した母と同様に失意のうちに半身付随の病身となって、事件の張本人の妹娘 Amalia の介護を受ける羽目となったのである。

2.8. 「残念ながら、止めが刺されて (leider den Rest gegeben)、彼は (父は) 二年前から、貴方 (K) が見たあんな状態で、それでも彼は母よりもまだ良くて、(母の) 死 (Ende) は日毎に迫ってますし、アマーリアの超人的な (介護の) 努力のお蔭で (dank der übermenschlichen Anstrengung) 延命されているだけなのです」<sup>20)</sup>、と Olga が淡々と語る両親の行末には、年老いて村八方の責めにあった Barnabas の父母の苛配な運命が込められている。更に悲劇的な事実、こうした無惨な >父親の家族のための戦いと努力 (für unsere Familie kämpfe und die Bemühungen des Vaters S. 350) < を引き受けて、姉娘 Olga と弟 Barnabas が必死に求め、かつ僅かで、取るに足らない >城との繋がりを (eine Verbindung mit dem Schloß) < 頼りに嘆願行動を続けている叙述の途中で、作品「城」は放棄されたのである。

ともかく作者 Kafka の両親、Hermann Kafka (1852 Wossek-

1931 Prag) と Julie Kafka (1856 Podiebrad-1934 Prag) は共に Barnabas の息子に一面類似させた、両親にとってはすべからず優柔不断で頼りがいのない、ひ弱な息子 Franz Kafka の死後、生き続けたが、3人の妹達は十数年後の Hitler 政権下のユダヤ人の大虐殺、想像を絶するホロコーストによって、すべて強制収容所 (KZ) で処刑されている。Elli Kafka (1889 Prag-1941 im KZ Auschwitz), Valli Kafka (1890 Prag-1942 im KZ Auschwitz) そして Otlka Kafka (1896 Prag-1943 oder 1944 im KZ Auschwitz) と、人類史上最悪の民族撲滅の犠牲者となってしまった。

2.9. Hartmut Binder が 1976 年に画期的な大著「Kafka in neuer Sicht」で、伝記的には Amalia のモデルとして、作品「城」執筆直前の冬に Kafka が知り合い、婚約解消まで至った最下層のユダヤ人家族出身の Julie Wohryzek を挙げているが<sup>21)</sup>、Barnabas の父親像には靴屋兼ユダヤ教会堂の小使であった、Julie Wohryzek の父親像が重ね合せていることが仮説できよう。更に Frieda が K の Barnabas 一家への接近を拒絶するように、Milena Jesenska が Kafka にこの Julie Wohryzek とその家族への交際を絶つよう厳しく要求していたことも合せてみると、一考に値する。

また Marthe Robert は「L'ANCIEN ET LE NOUVEAU」の中で、「村の入口の」橋屋く という宿屋には明らかにプロテスタントの教会をかたどり、出口には「紳士荘く」という看板と外観を備えたカトリック教会があって、その両者の中間、町外れの小路にあるバルナバス家の家はむしろユダヤ教と符合する。……数世紀前から福音をかたく拒否するユダヤ人の強情な態度への罰として理解されるべきである<sup>22)</sup>、と一面明解に解説しているが、結局は「バルナバス家の物語はこの小説『城』の軸であり、批評にとってはどんなに精密な注釈をしても、つまずき石となる<sup>23)</sup>として、作者 Kafka が作品中には秘めて語らずにいたユダヤ性 (Judentum) へのアプローチの難解さを指摘して止なかった。

### 3

Kafka は自己の「内なる」境界、Judentum (ユダヤ性) については秘法 (Kabbala) のごとく寡黙であったが、Anthony Northey の「Kafkas Mischpoche」<sup>24)</sup>によれば、Kafka の祖父 Jakob Kafka は南ボヘミアの小村 Wossek の出身で、当時その村には村人 95 人、20 家族と 1 つのシナゴークがあって、比較的大きなユダヤ人コミュニティが構成されていたとある。この小村で生まれた Kafka の父 Hermann Kafka には 3 人の兄弟と 2 人の姉妹がいて、母 Julie Kafka にも 3 人の兄弟と 2 人の異母兄弟があって、それぞれ運命的に親密なるユダヤ人一族 (Mischpoche) で息子 Franz Kafka の周辺を形成していたのであった。作品「城」での Barnabas 一家はそうした作者 Kafka を取り巻く Kafka 一族を反映し

ていた一面も否定できないだろう。

Hannah Arendt が「Die Verborgene Tradition」の中で展開している、「城」についての見解を引用して、この覚書の総括としたい。

「『城』はカフカがユダヤ人問題を扱った——ほぼそういっていいと思う——小説だが、(中略)カフカはそれをこの『城』という小説で示したのだ。彼が描いているのは同化というものの実際のドラマであって、同化の惹き起こす歪んだ側面といったものではない。このドラマで代弁されているのは、住家、仕事、家族、市民 (村民) 権といった人間の権利のほかは何も実際に望んでいないユダヤ人なのである」<sup>25)</sup>。

### Anmerkungen

- 1) 拙論：カフカの「城」に関する試論，II，アマーリアをめぐる覚書，長岡高専紀要 14 巻 1 号，1978，VI，オルガをめぐる覚書，日本歯科大学紀要第 16 号，1987，XVI，バルナバスをめぐる覚書，日本歯科大学紀要第 26 号，1997 をそれぞれ参照されたい。
- 2) Kafka, Franz: Das Schloss, Kritische Ausgabe, S. Fischer, 1983, S. 51.
- 3) Ebd. S. 52.
- 4) Ebd. S. 53.
- 5) Ebd. S. 55.
- 6) Ebd. S. 53.
- 7) Ebd. S. 262.
- 8) Ebd. S. 263.
- 9) Ebd. S. 268.
- 10) Ebd. S. 305.
- 11) Ebd. S. 311.
- 12) Ebd. S. 314.
- 13) Ebd. S. 317.
- 14) Ebd. S. 333.
- 15) Ebd. S. 330.
- 16) Ebd. S. 334.
- 17) Ebd. S. 336.
- 18) a. a. O.
- 19) Ebd. S. 339.
- 20) Ebd. S. 349.
- 21) Binder, Hartmut: Kafka in neuer Sicht, Carl Ernst Poeschel Verlag, 1976, S. 420ff.
- 22) Robert, Marthe: 古きものと新しきもの，城山良彦他訳，法政大学出版局，1973，174 頁
- 23) 同書，265 頁
- 24) Northey, Anthony: カフカ家の人々，石丸昭二訳，法政大学出版局，1988，5 頁。
- 25) Arendt, Hannah: パーリアとしてのユダヤ人，藤原隆裕宣訳，未来社，1989，62 頁，64 頁。

尚、引用文の ( ) 内は原文に即した筆者の補註である。